

## 2. 「望郷の想い」「逃走」について

多くの人が、望郷の思いを抱き、帰郷、退所を願い、さらには逃走を考え実行した経験を語っている。しかし、守衛、監房を恐れ、実現出来ず、病気を治すというあきらめの気持ちになっていく。

### (1) 強い望郷の思い

#### 望郷の思い

「それは皆同じ。夕方になると遠くの電車の灯をながめてた。」(1925年生 男性)

「5年間、ずっと思っていた。早く治したい、そして早く家に帰りたいと、強く強くおもっていた。それだけ。」(1928年生 男性)

「小6で入所。農家だったので、寮の食事が少なく、いつも空腹だったことが悲しかった。家に帰ればとりあえず食べることはできるので、それで帰りたい。一生帰れないのかと思うと悲しかった。」(1933年生 男性 1944年入所)

「入所してすぐに毎日つらく寂しかった。入所には母親が付添い1週間滞在するが、母親が帰った後、更にさびしく帰りたい。」(1952年生 男性 1967年入所)

「帰りたいと思った。出たいと思っていた。」(1940年生 女性)

#### 社会に出たい

「青春期でしょ。思春期。青春。やはり結婚したい訳ですよ。療養所内というのはある程度、男女間というのも制限されてる訳です。だから、同じ年代でも軽症な人もおれば、完全に両方曲って重傷な人もいるわけだから、そこで結婚したら、片方は出て行く、私は残らないといけないというのが嫌だということもあるし、お互いに出ないで、そこで暮らそうかという人は、くつつくわけです。ぼくらは、出たいとい気持ちがあるわけだから、そこで、一緒に出られるような人をさがすけども、なかなかみつからない。だから出て、社会に出て働けば、何とかなるんじゃないかなあという、そういう欲望が、我々にはあったんですね。若い世代には。それは、いつわざる、人間の本能的なものですよ。それがあってはじめて、あの当時を、出ようと、それで犀川先生のおかげで在宅治療ができたもので、それによって職業訓練ができて、免許証をとらすとか、社会の風習を教えるとか、そういう形になって、どんどん出ていくようになった。」(1937年生 男性)

「ずーと思っていました。再入所までは。社会復帰するつもりだったから。中で経験した、不自由感は少なかったけれど、望郷はずっとあった。再入所して、目の症状がひどくなって、失明を覚悟した時は、一生ここに居る気もちになった。」(1938年生 男性 1952年入所)

外出制限、守衛、監房への恐れ

「母親は生きていた時は行きたかったが、守衛がきびしかったので7年間で1回しか行っていない。」(1930年生 女性 1957年入所)

「つかまらなければ逃げたかった。帰りたいし、ご飯が腹一杯たべられるだけでも家にいた方がいいから。毎日のように思ったわけではないけど、「帰りたいなあ」とはしょっちゅう思っていた。監房に入れられるのが恐かった。」(1932年生 男性)

「厳しくてつかまって叱られた時は「イヤーこっちには(南静園には)入りたくない」と思ったりしていた。」(1943年生 女性 1950年入所)

「入園して半年ぐらいたった時、母が死亡したという電報がきた。すぐに行かないかんとあって許可を求めたが、許可がでなかった。母の死に目に会えなかった。子供心にも「何故行かせてもらえなかったのか」と納得いかなかった。父は既に死んでいないので、許可が下りなかった理由の説明もなかった。」(1944年生 男性 1955年入所)

あきらめて、病気をなおす

「入所の頃は 毎日 “帰りたい” と願い しばらくして “病気を治す” という気持ちにあきらめになった」(1939年生 男性)

「寂しい思いや、何時になったら退所できるのだろうという不安はあったが早く病気を治して家に帰りたいという気持だった。」(1934年生 男性 1971年入所)

「帰りたいとは思ったが、病気を治してから帰ろうと思ったので、逃げて帰ろうとは思わなかった。」(1934年生 男性 1960年入所)

「全員にあった。皆んな、療養所から出たいと思っていた。ある程度の年齢になっていて、社会へ出ても生活をしていく自信のない人は、園の生活を望んでいる人もあった。」(1950年生 男性)

親に拒否される

「1956年。新良田入学後に一度実家に外出帰省した。しかし、父からお金を渡され、実家になるべく寄りつかないようにと示唆された(親戚がくると困るから - という理由。)父からお金はたくさんもらったので、そのまま東京に行った。この時以来、実家には帰らなかった。家族が沖縄に帰る際も一緒に沖縄の療養所へと頼んだが、父から断られた」(1937年生 男性 1955年入所)

「離島にある実家に帰りたいという気持は常に持っていたが、それがままならない状況であったため外出して出向くのは那覇に住む伯父・伯母のところであった。そこで一晩

「すがることによって家・家族に対する思いをうめ合わせていた。」(1944年生 女性 1962年入所)

「一度出て、本島で一年暮らしたが(隠れる様に)、皆(家族)が困るからと、父に言われて、また入所する事になった。(1931年生 男性 1944年入所)

帰っても会えない、出られない

「小さかったので家に帰りたいというより兄弟に逢いたいという思いがあった。帰っても、周りに隠れて家に入るといふことで、周りの目に気をつかいながらであった。出る事ができなかった。」(1941年生 男性 1952年入所)

「帰りたいと思ったが、近所との関わりで帰れずつらかった。」(1936年生 女性 1965年入所)

## (2) 望郷の念無し

数少ないが望郷の念が無かったと言う人もいる。しかし、いつでも出られた人もいるが、60年代以降入所の人であり、あるいはそれ以前でも、戦争下であったり、園の方が楽だから、後遺症さらには予防法のために余儀なく断念したものだといえよう。

自由に出られた

「他の人の『望郷の思い』、隠れてふるさとに帰ることなど、自分には考えられない - 出るなら、いつでも出れるのだから...。」(1937年生 男性 1955年入所)

「特になし。自由な生活だったから。(その頃退所した人もすでにいたので、自分も出られる!)人の話では少々聞いている。」(1937年生 男性 1948年入所)

「実際に育ててもらった祖母は面会に来ても立入禁止の境界を超えて、平気で入ってきた。勝手に出入り。自分も勝手に出入りして、『カゴのふたを開けたまま、カゴの中で育った』という感じ。」(1935年生 男性 1944年入所)

「特になし。断ればいつでも外出、帰省可能な時代になっていた。但し、時々何でここに自分はいるのか、2年も経つと何となく自分はおかしな人間(世間に通用しない人間)になったのではと焦る気持ち、デパートに行くのもおっくう、落差を感じる、になった。」(1951年生 男性 1969年入所)

「なし。“出入り自由”。月2回は家に帰っていた。」(1931年生 男性 1964年入所)

戦争下で断念

「戦争の混乱した状態。園外も暮らしにくい世の中だったので、外へ出ようとは思わなかった。戦争がなければ、帰りたい、逃げたいと思ったかもしれない。」(1922年生 男)

性 1943 年入所)

#### 園の方が楽

「仲良く入所者同士で生活できていたので、出たいと思わなかった。家へ戻れば病気のことと肩身の狭い思いをするだろうから、園にいる方がラクだと考えていた。」(1926 年生 男性 1941 年入所)

#### 後遺症

「思わなかった。前半は思ったことがあった。が、後半は、いくらでも帰省できた。自分の場合夜行っても夜帰ってくる具合だから。帰りたいたと特に思わなかった。昔の顔、手足でなかったから、見せたくなかった。(1926 年生 男性 1946 年入所)

#### 予防法がなければ

「島に帰ろうという気持ちは、100%ありませんでした。その中に入って、こういう病気だと、こういう予防法だという、知識が得られれば得られる程、親に対する同情心、兄弟に対する同情心、私のためにそうとう悩んだらうなあと、当時小6生、中1生で、そんなに考えなかったけど、学校を卒業し外で働き、そういう仕組みが、わかればわかる程、家族や又故郷に帰っても大変だと、あれはそういう病気だったということで、色目で思われるのも嫌だという感じで、故郷に帰るとい、錦を上げてということは100%なかった。向こうから、遠ざかるような気持ちで、逃げるような気持ちでした。そういう気持ちになって、今、思うのは、予防法がなければ、そういう気持ちには、ならなかったと思う。ただ、それだけ。今のAIDSでも、隔離されたら大変ですよ。全滅ですよ。それを治療は受けるけど、かくしているから、その人の中にも自分で公表する人もありますけど、かくれながらにして、家族には迷惑をかけないという、そういうことではないか...。その制度が、今のような開けた社会であれば、我々もそんなに苦労はしなかったと思う。」(1937 年生 男性 1951 年入所)

#### 園が故郷

「小さいころから各地を転々としていたので、他の人とは逆に園がふるさとに思う。」(1940 年生 男性)

「療養所があったから生きてこられたという感謝の気持ちはあるんだけど。4~5歳の子、昼は遊ぶけど夜毛布をかぶって「かあちゃんよー」と泣きさけぶ姿、皆ここから出たいという思いはあった。自分の中に故郷がどことはいえない。被害、差別を受けてきたから故郷と言いたくない人はいっぱいいる。自分の故郷は園と思っている。」(1941 年生 女性 1949 年入所)

「社会に出ることが故郷へ帰ること。住んでいるところ園が第2のふるさと」(1946 年生 男性 1958 年入所)

**(3) 逃走経験**

逃走を考え実行した人もいた。しかし、連れ戻され、例え家まで帰れたとしても、居場所がなかった。

## 逃走を考える

「仲の良かった友達と”いかだ”を作って逃げようと思ったが、その友人は死んでしまった。両親の面会はよくあった。入療当時から、いつも、家に帰ることは考えていた。」  
(1932年生 男性 1943年入所)

## 逃走

「2代目多田園長の時はそう思って逃げ出した。家に帰りたと思うことはもう病気が染み込んでいたのでそんな気にはなれなかった。」(1918年生 男性 1936年入所)

「逃げ出すために手を切った。療養所は嫌で仕方なかった」(1928年生 男性 1940年入所)

「しばしばある。裏の方から渡し船で逃げたこともある。」(1934年生 男性 1959年入所)

「逃げてバス等から通報があり、部屋をみて回り、後で説教された。(世間に迷惑かけて)」(1936年生 男性 1952年入所)

「入所後2ヶ月後に一時帰りたと言ったが、認められず、これをきっかけに逃げ出すことになった。」(1942年生 男性 1954年入所)

「家に帰ろうと思って抜け出したことがある。駅への道もわからなく迷子になりかけたが、シスターがさがしに来て、連れ戻された。一度帰省したことがあったが、自分が帰ってきたことを喜ぶというよりは「ばれるのではないか」という母の感じが伝わってきて一晩で戻った。3回めの転居をした家で、自分が生まれた家ではなく家に帰ったという思いはしなかった。」(1950年生 女性)

## 教育を受けに

「にげ出したいというよりも外の高校に行きたいと、とても思った。島にはもう身内もいなかったの、島に帰りたとは特に思わなかった。以前何十年ぶりかで島に行くと(退所後)島のおば一達に「あい、あんた生きてたんだねー」としみじみといわれた。」  
(1947年生 女性 1960年入所)

「ここには将来はないと思っていたから、復学を理由に出ることを希望した。幸い、半年程で、希望がかなった。」(1947年生 男性 1968年入所)